

平成 23 年度
知床生態系維持回復事業
エゾシカ捕獲手法（困いわな）調査業務
報告書



平成 23（2011）年 5 月
環境省 釧路自然環境事務所

目次

| | |
|---------------|----|
| 1. 報告書概要 | 1 |
| 2. 事業（捕獲）実施地点 | 2 |
| 3. 捕獲方法 | 3 |
| 4. 結果 | 7 |
| 5. 考察 | 9 |
| 6. 引用文献 | 12 |

1. 報告書概要

事業名（英名）

平成 23 年度知床生態系維持回復事業エゾシカ捕獲手法（囲いわな）調査業務
（ Feasibility study on capturing method of sika deer by corral trap in 2011: project for maintenance and restoration of Shiretoko ecosystems ）

事業の背景・目的

知床世界自然遺産地域におけるエゾシカ捕獲手法の有効性や捕獲効率等について、将来的に知床世界自然遺産地域における生態系維持回復事業が行われる際に活用できるようにとりまとめることを目的に、ルサー相泊地区において、囲いわなによるエゾシカ捕獲を試行する。

事業実施体制

本調査業務は、環境省からの請負業務として公益財団法人 知床財団が実施した。

事業の手法・概要

「平成 22 年度知床生態系維持回復事業エゾシカ捕獲手法検討業務」において設置したルサ川左岸の囲いわなを活用し、エゾシカの捕獲を実施した。捕獲にあたっては希少猛禽類の繁殖・採食活動に配慮し、約 300 m 離れた建物内からの遠隔操作による扉閉鎖以外の夜間作業は控えた。捕獲した個体は有効活用に供した。また、生態系維持回復事業への活用を目的として、エゾシカの誘引状況や群れ構成等について調査し、囲いわなの効率的な運用方法についても検討した。

事業結果

平成 23 年 4～5 月にルサ川左岸の囲いわなによって、45 頭のエゾシカが生体捕獲された。繰り返し生体捕獲された標識個体を意図的に放逐した頭数および搬出前に脱走した頭数を差し引くと、計 36 頭が斜里町のエゾシカ有効活用施設へ、専用の移送用暗箱に入れられて生体で搬出された。生体搬出個体の内訳はオス（1 歳以上）27 頭、メス（1 歳以上）7 頭、0 歳（性別未確認）2 頭で、オスに偏っていた。扉閉鎖 1 回あたりの捕獲頭数は 1～8 頭、平均 3.5 頭であった。囲いわなの扉は 2 ヶ月間に計 13 回閉鎖され、捕獲間隔は 1～11 日（平均 4 日）であった。少数ながら 5 月下旬までエゾシカは囲いわな内に誘引されていた。

今後の予定

平成 23 年度の知床世界自然遺産地域科学委員会エゾシカ・陸上生態系ワーキンググループにおける議論の結果を踏まえ、ルサー相泊地区において囲いわなによるエゾシカ捕獲を継続するかどうかについて判断する。

2. 事業（捕獲）実施地点

北海道の北東部に位置する知床半島は、東半分を羅臼町、西半分を斜里町が占めている。本事業は、羅臼町のルサ川河口～アイドマリ川河口の8.2 km 区間（ルサ～相泊地区）のうち、南端にあたるルサ川下流域左岸（知床国立公園の第3種特別地域）の旧サケ・マスふ化場跡地の平坦地に仮設した囲いわなによって行った（図1のB、図2）。当該囲いわなは、「平成22年度知床生態系維持回復事業エゾシカ捕獲手法検討業務」において平成23年1月25日に既に設置されていたものを利用したものである。



図1. 事業実施地点の位置図. 青線は知床半島におけるエゾシカ越冬可能標高の目安. (カシミール3D解説本収録 5万分の1地形図を改変)



図2. ルサ川下流域の囲いわな周辺拡大図。ルサ FH は知床世界遺産ルサフィールドハウス（環境省施設）の略。

3. 捕獲方法

囲いわなの構造

今回捕獲施設として利用した囲いわな（corral trap）とは、支柱間にフェンスを張った囲い柵内に誘引餌を置き、餌に誘引されたエゾシカが出入り口から内部に入った時点で、出入り口を閉鎖して生体捕獲（生け捕り）するものである。

本業務に使用した囲いわなは、地上高2.6 mの亜鉛メッキ金属製支柱を3 m間隔で打ち込み、支柱間に地上高2.44 mの亜鉛メッキフェンス（金網）を張ったものである。撤去容易な仮設のものであるが、ルサ地区特有の北西方向からの強風に耐えられる構造とした。柵内の面積は1600 m²、周囲の柵の延長は163 mである（図3）。エゾシカの出入り口は2箇所設けた。エゾシカ用出入り口は間口2.5 mの落とし扉構造とし、約300 m離れた「知床世界遺産ルサフィールドハウス」からの遠隔操作で開閉が可能な電動駆動式とした。さらに遠隔操作で扉を閉鎖する際に、わな内部の状況を昼夜問わず把握できるように、監視

カメラと照明を各1台設置した。また上記の2箇所とは別に、捕獲したエゾシカを数頭ずつに仕分けた後に移送用暗箱に追い込んで搬出するための施設と暗箱接続用の出入り口を1箇所、小型重機等の車両進入用の扉（幅3m）を1箇所、人間のみの出入りするための扉を1箇所設置した。

なお、追い込み作業時のエゾシカの激突による負傷を防ぐため、柵内のコーナーの鈍角化や、金網内側への防風ネットの敷設が3月初旬に行われている（環境省釧路自然環境事務所, 2011a）。

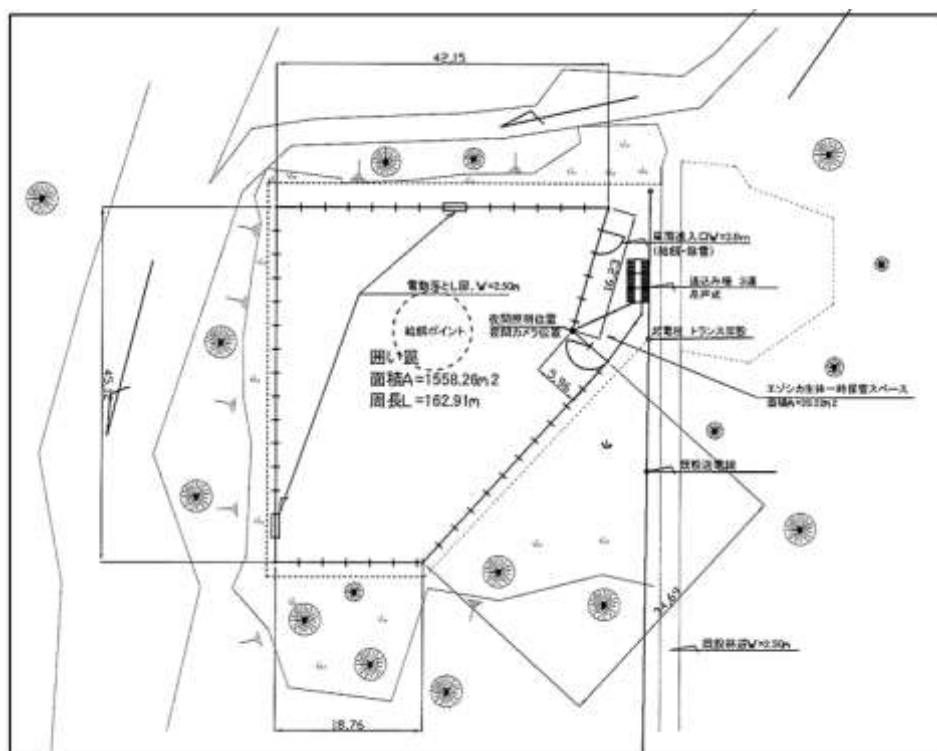


図3. 捕獲施設（囲いわな）の平面図。

餌付けによる誘引

餌付け用の餌は乾草ブロック（ルーサンヘイ、別名アルファルファヘイ：マメ科牧草のアルファルファを約25kg単位でブロックにしたもの）を主体とし、補助的にヘイキューブ（アルファルファを約4cm大の立方体に押し固めて乾燥させたもの）と少量の圧扁トウモロコシを用いた。

餌の乾草ブロックは数日に1回、1～2個を補充し、誘引餌が途切れないように配慮した。餌は、エゾシカ用出入り口の電動扉付近にも少量置いたが、大部分は監視カメラの正面に置いた。肉眼または監視カメラを通じて囲いわな周囲や内部にエゾシカを確認した場合は、日時、目撃頭数、性別等を随時記録した。なお監視カメラでは、毎週火曜日を除く週6日間、8:30～18:30の間は連続して、エゾシカの囲いわな内への誘引状況の記録を行なった。

さらに夜間や火曜日の日中にも随時フィールドハウス内において監視カメラ画像の確認を行なった。ただし昼間でも監視カメラの視野は狭く、誘引餌を置いている囲いわな中心部を含む全体の約1/2の範囲しか観察できなかった。電動扉（落とし扉）が開いており、監視カメラが正常に稼働して遠隔操作スイッチも操作可能であった日を有効なわな日（わなの稼働日数）1日、すなわち「1わな日」と定義した。監視カメラの故障等のトラブルのため、本調査期間中（4月4日～5月26日）のルサ川左岸囲いわなの稼働日数は、46日（46わな日）であった。

捕獲作業および捕獲個体の生体搬出作業

囲いわな内部にエゾシカが入っていることをルサフィールドハウス内の監視カメラで確認した時は、遠隔操作で2箇所の電動式落下扉を適宜閉鎖し、捕獲した。なお本事業においては、落とし扉の閉鎖によってエゾシカが囲いわな内部から脱出できない状況になった時点を「捕獲」と定義する。捕獲後は広いスペースにいるエゾシカ（写真1）を、吊り扉で3部屋に仕切ることができる追い込み部の中まで、長い棒などを持った作業員1～3名で追い込み、1頭から数頭単位に仕分けした（写真2）。仕分け後は暗箱接続用出入り口を介して移送用暗箱にエゾシカを入れ（写真3、4）、クレーンで暗箱ごとトラックの荷台に積み込み、斜里町のエゾシカ有効活用施設（株式会社知床エゾシカファーム）まで輸送した。

なお、付近に生息する希少猛禽類に配慮し、追い込み作業や搬出作業は昼間のみ実施した。すなわち、夜間にエゾシカが囲いわなに入った場合は、電動式落下扉の閉鎖のみを行い、翌朝以降に追い込み・搬出作業を行なった。



写真1. 扉閉鎖後の囲いわな内で落ち着きなく走っているメス成獣2頭。うち1頭（右の個体）は季節移動調査用の標識個体2番（4月25日）。



写真2. 追い込み部（収容部）内のメス成獣（4月12日）.



写真3. 移送用暗箱内に入れられた子ジカ（4月19日）.



写真 4. 移送用暗箱内に入れられた子ジカの拡大写真
(4月19日) .

4. 結果

餌付け誘引の結果

4月4日～5月26日の事業実施期間中、餌付け等の野外作業中に囲いわなの周囲や内部にエゾシカの姿が確認されたのは1回のみであった(5月20日15:00)。この時は標識個体(耳標番号17番)が単独で囲いわな内部において餌を食べている状態だったため、扉の閉鎖は実施しなかった。一方、ルサフィールドハウス内の監視モニターからは、後述の捕獲実施時(扉閉鎖時)の13回以外に3回、囲いわな内のエゾシカが確認された(表1)。監視カメラの視野は狭いため、左記の時点に囲いわな周囲にもエゾシカがいたか否かは確認できなかった。また5月3日～10日の8日間は監視カメラが故障し、修理に時間を要したため、この間は誘引状況の調査および捕獲が事実上実施できなかった。このため前述のとおり、囲いわなの稼働日数は46日(46わな日)となった。

4月4日17:30には計11頭のエゾシカが監視モニター上で確認されたが、当面わなに慣れさせてさらに多数の個体を一度に捕獲することを意図し、この時には扉を閉鎖しなかった。しかし、その後捕獲終了までの2ヵ月間に、11頭以上のエゾシカが囲いわな内部にい

る状況を確認できた機会は、皆無であった。

表 1. 扉閉鎖時以外のエゾシカ誘引確認状況.

| 確認日 | 確認時刻 | 日没時刻 | 天候 | シカ内訳 | | | | 備考 | |
|-------|-------|-------|----|------|----|----|----|----|-------------------|
| | | | | オス | メス | 0歳 | 不明 | | |
| 4月4日 | 17:30 | 17:49 | 晴れ | 6 | | | 5 | 11 | 囲いわな内。 |
| 4月7日 | 17:00 | 17:53 | 曇り | 1 | 3 | | | 4 | 囲いわな内。17:30以降は0頭。 |
| 5月16日 | 17:05 | 18:39 | 晴れ | | 1 | | | 1 | 囲いわな内。17:10以降は0頭。 |
| 5月20日 | 15:00 | 18:44 | 曇り | | 1 | | | 1 | 囲いわな内。標識個体のみ。 |

捕獲結果

平成 23 年 4 月 4 日～5 月 26 日に、45 頭のエゾシカが生体捕獲された (表 2)。わなの稼働日数 (1 わな日) あたりの捕獲頭数は 0.98 頭であった。扉閉鎖 1 回あたりの捕獲頭数は 1～8 頭、平均 3.5 頭であった。

繰り返し捕獲された標識個体を意図的に放逐した頭数および搬出までに脱走した頭数を差し引くと、計 36 頭が斜里町のエゾシカ有効活用施設へ、専用の移送用暗箱に入れられて生体で搬出された。生体搬出個体の内訳はオス (1 歳以上) 27 頭、メス (1 歳以上) 7 頭、0 歳 (性別未確認) 2 頭でオスに偏っていた。

扉閉鎖は 2 ヶ月間に計 13 回、捕獲実施間隔は 1～11 日 (平均 4 日) であった。ただし最長の捕獲間隔 11 日 (5 月 1 日～12 日) のうち、5 月 3 日～10 日は前述のとおり監視カメラの故障のため、捕獲が事実上休止していた。休止期間を挟まない状況下での捕獲間隔は、1～6 日 (平均 3.4 日) であった。

エゾシカは、5 月下旬まで囲いわな内に誘引されていた (表 2)。

捕獲された標識個体は、耳標番号 2 番が 1 回 (4 月 25 日)、同 17 番が 3 回 (4 月 18 日、21 日、5 月 1 日)、不明 (おそらく 17 番、5 月 19 日) が 1 回であった。扉閉鎖時、通常は全個体が閉鎖音に反応し、囲いわな内を落ち着きなく走り回る姿が監視カメラの映像で確認されたが、標識個体 17 番はいずれの扉閉鎖時においても、少し頭を上げただけですぐに落ち着いて採食を再開していた。

なお、春期に囲いわな捕獲を実施するにあたって、当初懸念されたヒグマによる誘引餌の採食および捕獲されたエゾシカの捕食を意図した囲いわな内への侵入や施設の損傷は確認されず、5 月に 2 回 (5 月 18 日、22 日)、囲いわな付近を通過したのみであった。

5 月 26 日夕方に一旦捕獲したエゾシカ 4 頭は、27 日朝までの間に脱走していた (表 2)。電動扉は閉鎖した状態のままであったが、車両進入用扉を固定していたロープがほどけていた。

表 2. 囲いわなによるエゾシカの捕獲結果（扉閉鎖時点）。

| 捕獲日 | 捕獲時刻 | 日没時刻 | 天候 | シカ内訳 | | | | | 備考 |
|-------|-------|-------|-------|------|----|----|----|----|-------------------|
| | | | | オス | メス | 0歳 | 不明 | 計 | |
| 4月8日 | 夜間 | 17:54 | 曇り | 3 | | | | 3 | |
| 4月11日 | 17:43 | 17:58 | うす曇り | 6 | 2 | | | 8 | |
| 4月16日 | 17:00 | 18:04 | 霧 | 2 | 1 | | | 3 | |
| 4月18日 | 17:42 | 18:06 | 曇り | 1 | 1 | 1 | | 3 | 標識付きメス1頭は放逐 |
| 4月21日 | 22:35 | 18:10 | 曇り | | 2 | 1 | | 3 | 標識付きメス1頭は放逐 |
| 4月22日 | 17:48 | 18:11 | 曇り | 2 | | | | 2 | |
| 4月25日 | 13:12 | 18:15 | うす曇り | | 2 | | | 2 | 標識付きメス1頭は放逐 |
| 5月1日 | 14:30 | 18:22 | 曇りのち雨 | 2 | 1 | | | 3 | 標識付きメス1頭は放逐 |
| 5月12日 | 19:00 | 18:35 | 晴れ | 7 | | | | 7 | |
| 5月14日 | 16:00 | 18:37 | 曇り | 2 | 2 | | | 4 | |
| 5月19日 | 18:00 | 18:42 | 晴れ | | 1 | | | 1 | 標識付きメス1頭のみで即放逐 |
| 5月20日 | 18:30 | 18:44 | 曇り時々雨 | 2 | | | | 2 | |
| 5月26日 | 17:10 | 18:50 | 晴れ | | | | 4 | 4 | 翌朝には脱走していたため搬出できず |
| 合計 | | | | 27 | 12 | 2 | 4 | 45 | のべ捕獲頭数(搬出は36頭) |

5. 考察

一般に、囲いわなによるエゾシカ捕獲の利点としては、

- 1) 生体捕獲が可能であるため、一時養鹿等により資源としての有効活用が可能
- 2) 好条件がそろえば一度に多数の捕獲が可能
- 3) 夜間や住宅隣接地など、銃猟の実施が困難な時間帯や場所でも捕獲が可能であることが挙げられている。

一方、囲いわなの欠点としては

- a) 施設の設置工事や維持管理等に一定の事前準備や投資が必要
- b) 一定面積の平坦地や、搬出用のアクセス道路が必要
- c) 施設の移動が困難なため、時間経過に伴い捕獲効率が低下すること等が挙げられている（環境省釧路自然環境事務所，2011）。

上記を念頭に、ルサー相泊地区における囲いわなによるエゾシカ捕獲について考察する。

囲いわなの利点

本事業において生体で搬出された 36 頭のうち、オス（27 頭）の大部分は有効活用施設に搬入後、比較的短期間で屠殺され、製品化された（知床エゾシカファーム，私信）。一方メス（7 頭）は一時養鹿施設に入れられ、肥育されている。肥育されたメスジカは、一般狩猟や有害捕獲によるエゾシカが入手困難となる時期にエゾシカ肉を安定供給するために役立てられる予定であるため、利点 1) については本事業で活かすことができた。オスが肥育されなかった理由は、飼育下の過密状態では角によって他個体が負傷しやすいためである。またオスは秋の繁殖期に多大なエネルギーを消費しており、栄養状態がメスよりも悪い個体が多いことも挙げられる。したがって本来はメスの捕獲頭数が多い方が、有効活用の観点からも個体数調整の観点からも望ましいが、本事業ではオスの捕獲頭数の方が多くなってしまった。栄養状態に余裕のあるメス成獣には、ルサ川左岸の囲いわなが警戒された可能性が考えられ、わなの運用方法（扉閉鎖間隔の変更など）が今後の課題である。

利点 2) については、扉閉鎖 1 回あたりの捕獲頭数が平均 3.5 頭 (範囲 1~8 頭) であり (表 2)、一度に多数のエゾシカを捕獲できたとは言い難い。しかし、一般的な銃猟においては、初弾を発砲した後は群れの全個体が遠くへ逃走してしまうことが多い。そのため通常は、1 つの群れから一度に複数個体を捕獲することは困難である。本事業では全 13 回の扉閉鎖のうち 12 回 (92.3%) で複数個体を捕獲しており、一般的な狩猟や有害捕獲と比較すると、効率的な捕獲ができたものと考えられる。また 4~5 月の 2 ヶ月間で 36 頭、1 月末からの総計では計 100 頭 (オス 1 歳以上 57 頭、メス 1 歳以上 38 頭、0 歳性別不明 5 頭) を搬出しており、継続することで「多数捕獲」ができたと言えなくもない。

利点 3) については、夜間に捕獲された回数が 3 回 (全捕獲機会の 23.1%) にとどまっております、十分に活かすことができたとは言い難い。しかし「鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律」に基づき、夜間の銃猟が禁止されていることを考慮すれば、13 頭 (全捕獲頭数の 28.9%) の夜間捕獲実績は貴重である。今後、囲いわな内部の頭数が事前に設定した数に達した時点で扉を自動的に落とす装置を導入するなどして、夜間に人員を配置せずに捕獲することが可能になった場合は、夜間を中心に囲いわなの捕獲効率が向上する可能性がある。

囲いわなの欠点

欠点 a) については、ルサー相泊地区においても、囲いわなの設置を制限する大きな要因であると考えられる。囲いわなは設置時に資材費や工事費がかかる上に、誘引餌の頻繁な運搬・補充作業や、扉閉鎖後の追い込み作業に従事する作業員の人件費が継続的に必要となる。さらに積雪の多いルサー相泊地区においては、取り付け道路 (約 400 m)、囲いわなの内部および落とし扉周囲の除雪作業が必要なため、除雪用重機の準備や除雪作業員の確保も必要である。エゾシカ製品の消費量は未だに多くはないため、有効活用業者の経営環境は厳しく、現段階では設置や維持管理のコストを、捕獲したエゾシカを販売することで吸収するのは難しい。したがって十分な事業費を確保できない場合、囲いわなの設置箇所数を増やすことは困難と言える。囲いわなによるエゾシカの捕獲頭数は、投資努力量あたりでは必ずしも多いとは限らない点に留意するよう、呼びかけている報告もある (高橋, 2006)。

ルサー相泊地区においては、本事業地の他に囲いわなを増設可能な場所は、昆布浜の道道山側の平坦地 (図 1 の E 地点付近) 以外には現実的に存在しない。したがって前述の欠点 b) も、囲いわなの設置を制限する大きな要因である。海岸線からの急斜面を一段登った上に広がる海岸段丘上の平坦地の森林内に、立木を利用して小型の囲いわなを多数設置することは可能であるが、誘引餌の頻繁な運搬に係わる労力の著しい増加や、捕獲したエゾシカの生体搬出が困難になることが予想される。

欠点 c) については、本事業では確認できなかった。本事業はルサ川左岸に囲いわなを初めて設置してから 3~4 ヶ月しか経過していない段階で実施された上、事業期間終盤の 5 月下旬まで若干の餌付け誘引効果が継続して認められており、月別捕獲数も 2 月 33 頭、3 月 31 頭 (環境省釧路自然環境事務所, 2011) に対して、4 月 24 頭、5 月 21 頭と推移し、

事業期間後半に大きく減少したわけではなかった。周辺から継続的に新規個体が流入して、捕獲効率が低下しにくかった可能性も考えられるが、同一地点において2～3年単位で捕獲を継続した場合における、長期傾向の把握は今後の課題である。

ただし、捕獲個体の性比がオスに偏っていたことから、メス成獣が本事業の囲いわなを短期間の学習で忌避したために、メス成獣の捕獲効率が相対的に低下していた可能性も考えられる。本事業に先だって同一地点で実施された、1月末～3月末の積雪期の囲いわな捕獲では、搬出に関わる有効活用業者の配車等の制約から、餌付けの初期段階に十分な馴化を実施しないまま、少数ずつの捕獲を開始した経緯がある。また、積雪期にメス成獣が多数採食している状況が観察された、南向きのササ斜面（囲いわなからの距離約300m、標高約100～180m）からは、囲いわな周辺で作業する人間や、扉閉鎖時に落ち着きなく囲いわな内部を走り回るエゾシカの姿が丸見えの状況であった。これらが原因で、もともと警戒心が強化されやすいメス成獣の一部に、囲いわなを警戒する個体（トラップシャイ個体）が生まれた可能性は否定できない。したがって、次のシカ年度以降（エゾシカの個体数が大きく変動する出産期に合わせて6月1日を年度初めとする、シカ個体数管理に主眼を置いた年度の区分法）にも、ルサ川左岸で囲いわな捕獲を実施する場合は、トラップシャイ個体を極力作りださないような配慮が捕獲開始当初から必要である。具体的には、シャープシューティングの餌付け方法に準じて、餌付け開始後3週間は餌の補充だけを実施して扉の閉鎖を見送り、多数個体が囲いわなに馴化した後に捕獲を開始する方法が考えられる。一方で本事業では、中途半端に扉閉鎖を見送ると逆に貴重な捕獲機会を逃してしまう事例も何度か認められており、他地域での捕獲実施例も参考に、最終的な捕獲総数を多くするための適切な扉閉鎖間隔を、時期に応じて検討していく必要がある。



写真5. 繰り返し捕獲された耳標番号17番の標識個体（4月19日）。

わな馴れ個体について

例数は少ないものの、特定の個体を捕獲した後、意図的に放逐することを繰り返したことで、囲いわなの内部に入ることに当該個体が抵抗感を持たなくなったと推測される事例も認められた。環境省による別事業（季節移動調査）で電波発信機と耳標を2009年3月に装着されたメス成獣22頭のうちの1頭である、耳標番号17番の標識個体（写真5）は、2月23日以降に5回以上囲いわなに入ったことが確認された。さらに、2～5回目は他の個体1～2頭と一緒に捕獲されていた。したがってこの個体は、自ら率先して囲いわなの中へ入ることで、囲いわなに対する他個体の警戒心を緩めることに貢献した可能性がある。よって捕獲効率を低下させないためには、あらかじめ標識されていた個体や個体識別が可能な特徴的な個体の一部については、扉閉鎖後も意図的に放逐し、再び別の個体と群れを形成させることが有効である可能性も考えられる。なお、前述の17番はメス成獣であるが、メス成獣の標識個体は他にも2頭（2番および16番）が囲いわなで捕獲されている。これら2頭の捕獲回数はそれぞれ1回のみであり、繰り返し捕獲されることはなかった。このことから、これら2頭は囲いわなを警戒する方向に学習してしまったと推測される。したがって、囲いわなの捕獲率向上を主目的に一部個体を意図的に放逐する場合は、越冬期に栄養状態が悪いことが多く、餌に誘引されやすいと考えられるオス成獣を選択して放逐する方が無難かもしれない。

まとめ

以上を総括すると、同時に複数個体の捕獲や夜間捕獲が可能である囲いわなは、運用方法の改善が求められるものの、ルサー相泊地区においてエゾシカの生息密度低下を目指す際に有効な捕獲手法の一つとなりうる。ただし、囲いわなの欠点である設置・管理に係わる高いコストや設置場所の制約等から、この手法単独で同地区のエゾシカを大幅に減らすことは現実的には困難と考えられる。

6. 引用文献

- 1) 環境省釧路自然環境事務所 2011a. 環境省請負事業 平成22年度知床生態系維持回復事業エゾシカ捕獲手法調査業務報告書. 財団法人知床財団. 42 pp.
- 2) 高橋裕史 2006. 大型囲いワナによる捕獲. (梶光一・高橋裕史 編: ニホンジカ捕獲ハンドブック) pp. 14-38. 北海道環境科学研究センター・独立行政法人森林総合研究所北海道支所, 札幌.

付表 1. H22 シカ年度 1～5 月のルサ川下流域左岸の囲いわなにおけるエゾシカ捕獲結果.

| 捕獲日 | 時刻 | 天候 | シカ内訳 | | | | 備考 | |
|-------|-------|-------|------|----|----|----|-----|-----------------------------|
| | | | オス | メス | 0歳 | 不明 | | 計 |
| 1月31日 | 15:45 | 晴れ | 4 | | | | 4 | 対岸で同日にSharpshooting(SS)捕獲成功 |
| 2月4日 | 16:15 | 曇り | | 1 | | | 1 | 同日SS餌場にシカ出現なし |
| 2月6日 | 夕方 | 晴れ | 1 | 2 | | | 3 | |
| 2月15日 | 16:15 | 快晴 | 1 | | | | 1 | 同日SS餌場にシカ出現なし |
| 2月19日 | 18:43 | 晴れ | 1 | | | | 1 | 同日SS餌場にシカ出現なし |
| 2月22日 | 16:00 | 晴れ | | 4 | | | 4 | |
| 2月23日 | 18:00 | 快晴 | 9 | 13 | 1 | | 23 | 標識付きメス2頭は放逐 |
| 3月1日 | 18:30 | 晴れ | 3 | 1 | | | 4 | |
| 3月6日 | 17:00 | 晴れ | 1 | 2 | | | 3 | 3/6以降対岸でSS発砲なし |
| 3月8日 | 23:00 | 晴れ | 2 | | | | 2 | |
| 3月11日 | 午後 | 晴れ | 3 | | | | 3 | |
| 3月15日 | 16:00 | 晴れ | 1 | | | | 1 | |
| 同上 | 18:30 | 晴れ | 3 | 4 | 1 | | 8 | |
| 3月16日 | 16:25 | 曇り時々雪 | | 4 | | | 4 | メス1頭追い込み断念、放逐。 |
| 3月22日 | 20:00 | 晴れ | 1 | 1 | | | 2 | 標識付きメス1頭は放逐 |
| 3月25日 | 22:00 | 晴れ | | 1 | | | 1 | |
| 3月26日 | 深夜24時 | 雪 | 2 | 1 | | | 3 | |
| 4月8日 | 夜 | 曇り | 3 | | | | 3 | |
| 4月11日 | 17:43 | うす曇り | 6 | 2 | | | 8 | |
| 4月16日 | 17:00 | 霧 | 2 | 1 | | | 3 | |
| 4月18日 | 17:42 | 曇り | 1 | 1 | 1 | | 3 | 標識付きメス1頭は放逐 |
| 4月21日 | 22:35 | 曇り | | 2 | 1 | | 3 | 標識付きメス1頭は放逐 |
| 4月22日 | 17:48 | 曇り | 2 | | | | 2 | |
| 4月25日 | 13:12 | うす曇り | | 2 | | | 2 | 標識付きメス1頭は放逐 |
| 5月1日 | 14:30 | 曇りのち雨 | 2 | 1 | | | 3 | 標識付きメス1頭は放逐 |
| 5月12日 | 19:00 | 晴れ | 7 | | | | 7 | |
| 5月14日 | 16:00 | 曇り | 2 | 2 | | | 4 | |
| 5月19日 | 18:00 | 晴れ | | 1 | | | 1 | 標識付きメス1頭は放逐 |
| 5月20日 | 18:30 | 曇り時々雨 | 2 | | | | 2 | |
| 5月26日 | 17:10 | 晴れ | | | | 4 | 4 | 翌朝には脱走していたため搬出できず |
| 合計 | | | 59 | 46 | 4 | 4 | 113 | のべ捕獲頭数(搬出は100頭) |

環境省 釧路自然環境事務所 請負業務

**事業名：平成 23 年度 知床生態系維持回復事業 エゾシカ捕獲手法
(罠いわな) 調査業務 業務報告書**

事業期間：平成 23 (2011) 年 4 月 1 日～平成 23 (2011) 年 5 月 31 日

事業実施者：公益財団法人 知床財団

〒099-4356 北海道斜里郡斜里町岩宇別 531

知床自然センター内

TEL : 0152-24-2114



リサイクル適性の表示：紙へリサイクル可

この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料〔Aランク〕のみを用いて作製しています。